



NTTOBSV 会会報 No. 17

2010年5月18日(火)

Home page : <http://sv.nttob.org/>

e-mail : sv@info.nttob.org

目次

◆[NTT OB SV 会会報への寄稿](#)

[JICA 青年海外協力隊事務局](#)

[募集課長 佐藤 睦氏](#)

◆[本会入会者リレー寄稿 私とミャンマー](#)

[JOCVOB 山崎 義行氏](#)

◆[現シニアボランティア活動報告](#)

[プノンペン便り報告 須山勝彦氏 \(カンボジア\)](#)

◆ [NTT グループからの青年海外協力隊派遣状況](#)

[目で見える青年海外協力隊派遣状況](#)

NTTOBSV 会会報への寄稿

JICA 青年海外協力隊事務局 募集課長 佐藤 睦

平素は JICA ボランティア事業に対しまして、格別のご理解とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。NTT OB SV 会会報 No. 17 の発行に当たり、平成 22 年度春募集の状況も含め、今後の JICA ボランティア事業につきまして、想いの一端を述べさせていただきます。

4月1日から5月17日までの日程で実施されている平成22年度 JICA ボランティアの春募集の状況ですが、4月25日現在、全国の募集説明会への参集者数は、シニア海外ボランティア(以下「SV」)は2,720名、青年海外協力隊(以下「JOCV」)は6,274名となっております。貴会をはじめ、各OB会の皆様のご協力のお陰をもちまして、多くの方々に JICA ボランティアに関心を持っていただき、説明会に足を運んでいただいております。大変有難いと考えております。

しかしながら、前回(平成21年度春募集)の同時期と比較しますと、SVでは約500名、JOCVについては約1,000名ほど、下回っている状況です。要因はまだはっきりとは分かりませんが、最近の若者の「超安定志向」に代表されるように、日本全体の「内向き傾向」が相当に進んでいるような印象を持たざるを得ません。残りの募集期間を通じて、同事業の魅

力・価値を丁寧にお伝えし、一人でも多くの方に応募していただけるよう、取り組んでいきたいと考えております。

2009年1月に現在の部署に異動して1年4ヶ月が経ちました。担当の仕事柄、募集説明会や各種イベント等において、その参加者（シニアも青年も）と直接やり取りをすることが多いのですが、ボランティアに強い関心を持っている方々が全国にたくさんいることを嬉しく感じることもある反面、「淡白」、「受動的」、「内向き」といった印象を持つことが少なくありません。

説明会の応募相談に対応していても、募集要項を袋から取り出すこともなく「私に何ができるのか教えてください。」などと聞いてきたり、ただ単に試験に受かるためのテクニックを知りたがったりする方がいます。小職が協力隊に応募した時（平成8年度）と比べても、現地でのボランティア活動への熱い思いなどを、期待と不安を交えつつ語ってくるような人は少なくなったように感じているのですが、気のせいでしょうか。

昨年の11月に台湾に出張する機会がありました。目的は、台湾の行政機関が主催する海外ボランティアセミナーに出席し、台湾の大学生、NGO、一般市民等に対してJICAボランティア事業を紹介することです。

私が先ず驚いたのは、JICAボランティアについてすでに知っているという方々がかなり多かったこと、なかにはアフリカや大洋州の国々でのボランティアプログラムに自費で参加し、そこでJICA事務所を訪ねて活動中のJICAボランティアを紹介してもらい数日間活動を共にした、といった熱心な方までいたことでした。

一通りの説明を終えた後、200名ほどの座席がほぼ一杯となった会場から質問を受け付けたのですが、真剣な質問が途切れることがありません。特に「自分たちもJICAボランティアに参加したいが、可能か？」という質問に対して、「日本国民の税金によって実施されている事業であり、また受入国との関係もあり、日本国籍を有していることを資格要件としている」と回答した時の、会場全体が落胆のため息につつまれた時は、（仕方がないのですが）こちらもなにか申し訳ないという思いになってしまいました。

あるシニア世代の方からは、子どもの教育に非常に役立つものであり、自分の子どもにも参加させたいといった意見も出されました。セミナー終了後も多数の人が私を取り囲み、熱い意見交換ができました。

経済的に豊かになり、社会的にも成熟しつつある台湾では、一昨年の台風で大きな被害を出した際の国内のボランティアの活躍もあいまって、ボランティアへの関心が急速に高まっているようです。

また台湾にもJICAボランティアをモデルとして整備した長期の海外ボランティア事業があるのですが、国交締結国（派遣国）が限定されているためあまり魅力的には映っておらず、その分余計に日本のJICAボランティア事業への注目度も高いということも分かりました。日本の募集説明会の雰囲気・感覚でいた私は、大きな衝撃を受けて帰ってきました。

事情が異なる日本と台湾を同一に論じることはできませんが、このような海外ボランティアに対する大きな盛り上がりをも日本でも期待できないもののでしょうか。

海外ボランティアに対する日本社会の関心・評価をより高めていくためには、途上国に貢献するだけでなく、海外から日本を見つめることによって日本の良さや問題点を再発見して帰国し、ボランティア経験を活かして、日本の抱える様々な課題にチャレンジしている帰

国ボランティアの姿を一層伝えていく必要があると考えています。

「日本も元気にできる」JICA ボランティアの意義・価値をこれまで以上に広報していきたいと考えていますので、今後ともご理解・ご協力をいただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

以上

本会入会者リレー寄稿 第4回 私とミャンマー

2010年5月3日 山崎 義行

リレー寄稿のお鉢が廻って来ましたので昔の記録を読返しながらこの会と縁の深い「BHNテレコム支援協議会」との出会いともなったミャンマーの事を少し書かせていただきます。

1997年、初めてミャンマーを訪れた。ほとんどの日本人が持っているだろうイメージは「軍政統治の国＝大変危険・怖い国」と言うものだと思う。実際、私もそう思って初めてミャンマーの首都ヤンゴンに入った。

しかしそんな先入観は国内に入ってミャンマーの人々と触れ合う事により見事に打ち消されてしまう。



ヤンゴンのシンボル「シェダゴンパゴダ（寺院）」



世界遺産のパガンのパゴダ群

「人々がとてもやさしい、誠実で誠意がある」そして皮肉にも厳しい軍政のお蔭？で「とても治安の良い安全な国」となっている。東南アジア各国を仕事で廻ったがある意味この国ほど安全な国はない、帰る頃にはもう一度訪れたいと思うようになっていた。そしてその願いは間もなく叶う事となる（後述）。

ビルマ（ミャンマー）の人々は日本を自分たちがイギリスから独立するのに力を貸してくれた国と今もその恩義を忘れていない。敗戦後の日本に「米」の援助をしているのもその表れだ。

そして、ミャンマー独立の父と呼ばれ国民の絶大な人気を集めているのがアウンサン將軍。そう、あのスー・チーさんのお父さんなのです。

軍政は1990年の選挙で、その超有名人の娘であるスー・チーさんの政党が圧勝したに

も関らず政権移譲する事はなかった。

その後のミャンマーはご存じの通り、世界中からの経済制裁を受け、今では世界の最貧国の仲間入りをしてしまった。

その昔、アジアからヨーロッパへ飛ぶ飛行機の殆どはラングーン（現ヤンゴン）で羽根を休めていたと言うのに・・・。

軍政下と言う事で各国からの援助も途絶えがちだがミャンマーの人々はそんな中でも生きて行かなくてはならない。そういう時こそNGOの出番！とBHNはミャンマーの医療の要であるヤンゴン総合病院のPBXの現状を聞きその更改事業を計画した。その時の状況はと言うと、内線電話機100台程のうち動いている物はほんの十数台、外線は数回線しかない。



当時動いていた沖電気製PBXとオペレータ用応答台

イギリス統治時代に作られたという広い敷地を持つ病院の緊急伝達方法は「メッセンジャーボーイ」だ。せめて内線電話機だけでも復活させれば先生方への連絡時間も短縮され何人かの命を救えるかも知れない。

ましてや現状の交換機は古い日本製である、これこそ我々の使命・・・とこのBHNのプロジェクトは始動し私は更改工事の監督として現地を任される事になった。

足かけ2年に渡り数回、長い時で1ヵ月ほど滞在した。PBX設置工事はNECのタイ人技術者に、線路・宅内工事はミャンマー郵電省に依頼した。

そして、十ヶ月あまりをかけて完工、最新のNEC製デジタルPBX（右の写真）。内線150台、外線は郵電省の協力もあり一挙に20回線。

1998年の完成&贈呈式には当時の厚生大臣と通信大臣が列席。それ程、待ち望んでいたインフラだったと言えよう。

開通すると、「通信の力」を余すところなく発揮、内線を使って離れたところにある救急棟からドクターの呼出しが簡単にできるようになり、深夜の各病棟間の連絡も迅速&簡単、確実にになった。

外線が増えたお蔭で外からの電話が掛かりやすい、これまでは連絡がつかずわざわざ来ていたのだ。病院内からも連絡が入れやすくとっても便利になった。



副産物と言うのか地方病院のドクターからヤンゴン病院の専門医への問い合わせが簡単になり地方医療のレベル向上にも寄与できたと聞いている。

そしてBHNテレコム支援協議会はこの効果を見て、この後の数年間で5ヶ所の病院にPBX等を援助しミャンマーの病院の通信インフラの整備に力を注ぐ事になる。

それから5年が過ぎた春、再度BHNの要請で久々にミャンマーを訪れた。

ミャンマーはこの5年間時間が止っていたのだろうか、ほんの少し新しい建造物が出て来ている以外は何も変わっていない。(これも経済制裁の効果?)もちろん人々も変わっていない。

病院で出迎えてくれた院長(写真左側、赤レンガの建物が病院)も懐かしい笑顔で「ミンガラバ(こんにちは)！」と握手を求めて来た。ひとしきり昔話に花を咲かせて交換室に行くとオペレーターのおばちゃんも覚えていてくれて(と言っても彼女らは英語が話せない、私もミンガラバ以外は話せない)笑顔と笑顔の交換で再開を喜んだ。



そしてさらに時は過ぎ2006年、またもミャンマーを訪問した。今度は娘と一緒に。親の影響(?)か東京外語大ビルマ語学科に進学した娘は3年生に上がる前に語学力を試したいと渡航を決意、そこに私がくっついて行ったと言う次第。

8年前を思い出しローカルバスを乗りついでのパガンへの旅。娘は現地の子供たちをつかまえてビルマ語でおしゃべり。現地の言葉で会話出来るってなんて素敵な事だろう!

もちろん病院にも挨拶。既に院長は替っていたが交換手はまだ数人が残っており今回は娘の通訳で存分に意思の疎通ができ本当に感動した(写真は娘と小さなお坊さんたち)。

「やっぱりいいね」・・・と、娘も共感! ミャンマーとの「縁」を感じながらこの国は今でも私の「もう一度行きたい国」の上位にランクしている。



後書き: 本稿は2003年「通信興業新聞」に投稿した原稿に加筆したものです。

略歴

昭和44年4月 大分県国東電報報話局入社
青年海外協力隊参加 昭和62年1次隊 西サモア 宅内電話工事
1996年 NTTインターナショナル(株) 出向
2000年8月 NTT西日本(株) 退職
JICA シニア海外ボランティア参加 2000年 ヨルダン 電話技術

プノンペン便り សំបុត្រពីភ្នំពេញ

プノンペン便り No. 5

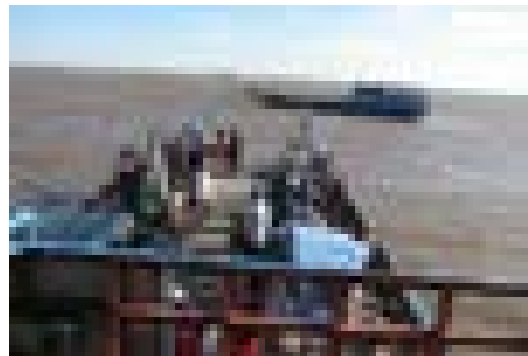
2009年12月16日 須山 勝彦

1. カンボジアの婚約式

私がこの学校へ着任した4月、教務主任のV先生が今年(数え年で)30才になったので結婚したいと言っていた。先日、おもいがけなく婚約式の招待状を貰った。メコン川の対岸のカンダール州アレイ・クサット村のお嫁さんの実家で夜7時とあった。後でよく読んでみると英語ではpmであったが、その上にカンボジア語でプルーク(朝)と書いてあった。印刷屋がamとpmを間違えたらしい。日本人の常識では夜7時が妥当だが、カンボジアでは結婚式もお葬式も朝の涼しい内に始まる様である。

さて朝7時から始まるとすると何時頃に行ったらいいだろうか?1時間位遅れて行くのが常識かなと見当をつけ、7時半に家を出た。地図で見ると6Km位だがメコン川を渡らなければならない。フェリー乗り場までトゥクトゥク(三輪タクシー)でき、船に乗り込んだ。料金は20円、バイクや物売りの屋台も乗り込む庶民の足である。

プノンペンビルは林立する大都会だが30分の船旅で、土の細い道にココヤシの木が並ぶカンボジアの田舎に着いた。しばらく歩き村の市場を抜けると婚家があった。8時半に着いたが庭は大勢のお客さんでにぎわい宴たけなわであった。カンボジアの人は時間に正確だ。7時にお供え物を捧げて婚家へ行くパレードがあり、その後朝食の接待が続いているようだ。室内では親族で婚約の儀式が行われているところだった。指輪の交換があり、そのあとの結納金の交換が面白かった。1ドル紙幣(物価の違いを考えると千円札)60枚を盆の上に扇型に並べ、母親から母親へ渡し、それをハンドバックに詰込む儀式。どこの国でも財布のひもは奥さんが握っていることを実感させられる一コマであった。



メコン川のフェリー。自動車は4台まで積める。村の中の1本道。首都に近いので裕福な家が多い。村の人は途中で帰るが、招待客はお昼まで居る。婚約指輪の交換。この後2人はお色直しをした。

2. 新学期がはじまる プレアコソマ技術学院の学生数 (他に夜間部300)

11月10日から新学期が始まった。今年の新入生は約1000人、この内500人は奨学生で授業料免除だが、残りの500人は授業料を払った学生だ。公務員の月給が70ドルの国で年間350ドルの授業料はかなりの出費だが、最近の建築ブー

ムと携帯電話ブームで特に土木科と電気科の人気が高い。電子科の学生はもちろん通信会社に就職するが、無線中継局の保守など電気科の求人の方が多いようだ。

ボランティア活動は人に支えられている私の仕事はエレクトロニクスの新しい技術を先生方に教え、教育内容のレベルアップを図ることであるが、なかなかチャンスがない。先生方は授業が忙しく、また(給料が安い)他の仕事を掛け持ちしているため、授業が終わるとすぐ帰ってしまう。新しい技術を教えて欲しいと

よく言われるが、実際に自分の時間をつぶしてまで習いに来てくれる先生は少ない。以前は、

教えた技術の教材を作り、先生方を集め講習会を開いたこともあるが、今回はこちらから強制したくない。ボランティア活動は自分1人でできるものではなく、皆に支えられて初めて成り立つという心境である。したがって、相手から頼まれたことは何でも手伝う便利屋に徹するつもりだ。新学期に入り、K先生から新しく「センサー」の授業を受け持つので手伝ってほしいと頼まれた。



プレアコソマ技術学院の学生数 (他に夜間部 300)

インターネットで技術情報を調べ、学校にある機材でデモンストレーション回路を作り、K先生と授業に臨んだ。私にとっては初めての学生との交流であり、携帯で写真を撮る学生の反応など、とても楽しかった。日本ではロボットが学生に人気があるが、カンボジアの学生には単なる玩具としか見えないようだ。もう少し実用的なもの、例えば自動ドアに関心がある。もう少し実用的なもの、例えば自動

	学科	高校	短大	大学	合計
	工学系	電気	60	221	327
電子		28	71	140	239
土木		41	292	467	800
合計		129	584	934	1647
ビジネス系		経営		60	99
	会計		60	139	199
	マーケティング		120	87	207
	計		240	325	565

ドアに関心がある。プノンペンではビル建設が盛んだが、私の知る限りでは自動ドアの付いたビルはない。K先生がシステム研究室を新しく作ったので、自動ドアの試作品を一緒に作ろうと今話している。

NTTグループからの海外青年協力隊派遣状況

NTTグループから青年海外協力隊（JOCV）派遣状況をお知らせいただきました。興味深いデータが含まれておりますのでご一読ください。また詳細なグラフを添付しましたので合わせてご覧下さい。

1. 現在の派遣状況

現在6名の方が活躍中で、内女性が2名です。近日中に1名が派遣予定です。派遣先としてアジア地域が多く、中でもコンピュータ関係の要件が多く、主にNTTデータからの派遣であることが特徴的です。任期は全て2年間です。下表にその概要を示します。

	派遣国	指導科目	派遣期間	備考
1	ベリーズ	PCインストラクター	2009.9～2011.9	女性、中南米
2	カンボジア	理数科教師	2009.9～2011.9	女性
3	セネガル	村落開発普及員	2009.9～2011.9	アフリカ
4	スリランカ	コンピュータ技術	2009.9～2011.9	
5	ウズベキスタン	コンピュータ技術	2010.1～2012.1	
6	ケニア	コンピュータ技術	2010.1～2012.1	
7	ブータン	コンピュータ技術	2010.6～2012.6	派遣予定

2. 派遣地域別、国別

1966年から2009年までの派遣者総数は490名に及びます。派遣地域別では、中近東アフリカが240名と最も多く、アジア大洋州168名、中南米79名です。

その内、中近東アフリカの主な国では、ザンビア51名、ケニア38名、ガーナ36名、タンザニア33名、マラウイ27名です。

また、アジア大洋州の主な国では、ネパール27名、西サモア27名、ラオス19名、スリランカ17名、インドネシア16名、ブータン14名です。

更に、中南米の主な国では、ホンジュラス31名、パラグアイ11名です。

3. 派遣職種別

電話線路が180名で最も多く、電話交換機106名、無線通信機95名が続き、最近多くなったコンピュータ技術は50名で、搬送20名、電力11名、宅内電話6名です。その外少人数ですが、村落開発普及、理数・体育教師、看護師、建築等があります。

4. 派遣年度別

1966年から2010年までの平均年度別派遣者数は約11名ですが、最多は1989年の36名です。その前後の1984年から1994年の平均では24名です。最近15年間の平均は5人弱です。

目で見ると「NTTグループの海外青年協力隊派遣状況」を、PDFファイルからの変換なのでチョットみにくいますが、編集後記の後に添付いたします。

編集後記

- ・ 編集担当しております村上です。今回はJICA海外青年協力隊事務局・募集課長 佐藤 睦氏から寄稿頂きました。それによりますと、近年海外ボランティア募集の応募の人数が減少傾向にあるようです。最近のニュースで新入社員は海外勤務お断りが多いとか、佐藤課長の言われる海外ボランティアの応募者が減少傾向にあることと符合しているような気がします。
- ・
- ・ NTT東日本松永さんの協力でNTTグループから、青年協力隊で活躍している現役の皆さんの情報も掲載する事ができました。今後できれば、NTTグループの海外ボランティア活動を紹介していく方針です。関係者皆様のご協力をお願いします。
- ・ 事務局を担当しております加藤です。今回のリレー寄稿には山崎義行さんの「私とミャンマー」を掲載させていただいております。山崎さんがBHNテレコム支援協議会に居られて時の活躍振りの一端を紹介していただきました。人道支援として過疎地における通信の重要性を再認識した次第です。現在NTTOBSV会はBHNに力強い応援をいただきながら進めております。これも何かの縁かと感謝しております。
- ・ 現地だよりは、須山勝彦さんに「プノンペン便り」をいただきました。NTTOBSV会の構成はNTT関係者のみならず範囲を広げようとしております。須山さんはその第一号で富士通出身の方です。須山さんから次のお便りもいただいております。

「JICA ホームページの世界 HOT アングルに記事が掲載されたので、お知らせします。内容はプノンペン便り No.2 の1部抜粋です。

<http://www2.jica.go.jp/hotangle/asia/cambodia/000736.html> 」

総編集長：NTTOBSV 事務局長 加藤隆

編集長：NTTOBSV 村上勝臣

発行：NTTOBSV 会 (kato2415@jasmine.ocn.ne.jp)

目で見るNTTグループの海外青年協力隊派遣状況

2010/4/19

1. 派遣国別

アジア大洋州地域																	小計			
	ネパール	西サモア	ラオス	スリランカ	インドネシア	ブータン	マレーシア	フィリピン	ウズベキスタン	タイ	カンボジア	トンガ	モルディブ	モンゴル	中国	P.N.G	ハンガラデシュ	ハラオ	ウズベキスタン	小計
～平成22年度	27	27	19	17	16	14	8	7	5	5	5	4	4	2	2	2	2	1	1	168

中近東アフリカ地域															小計	
	ガンビア	ケニア	カーナ	タンザニア	マラウイ	リベリア	エチオピア	シンバブエ	ルワンダ	ニジェール	モロッコ	シリア	チュニジア	ボツワナ	セネガル	小計
～平成22年度	51	38	36	33	27	14	13	11	4	4	2	2	2	2	1	240

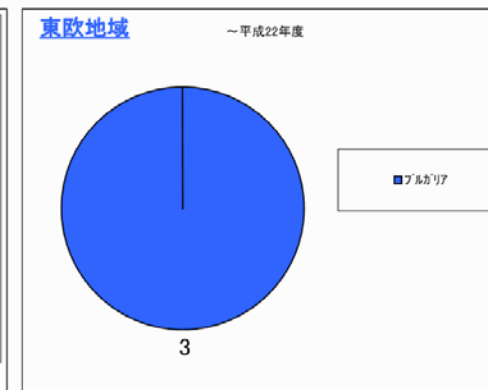
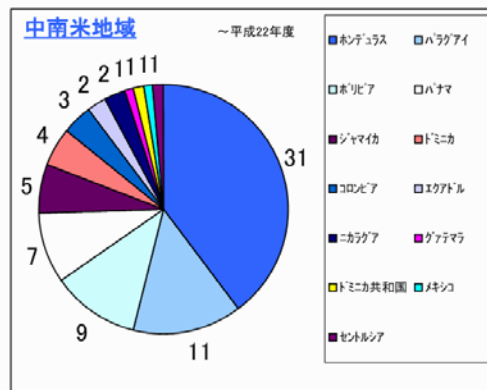
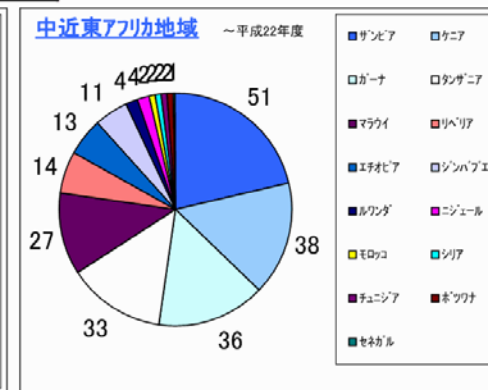
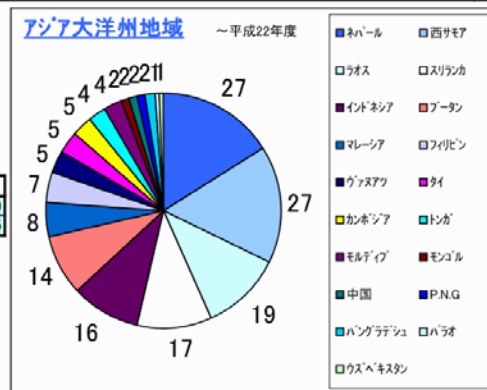
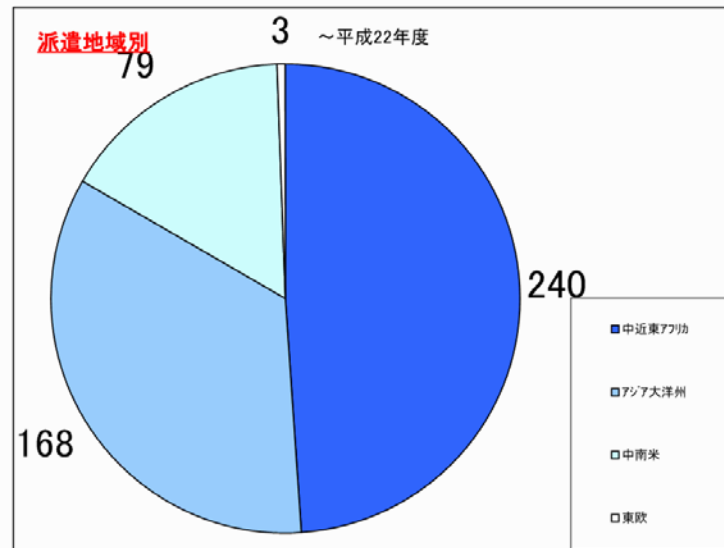
中南米地域															小計
	ホンデュラス	ハラグアイ	ホリビア	ハナマ	ジャマイカ	ドミニカ	コロネビア	エグアドル	ニカラグア	グアテマラ	ドミニカ共和国	メキシコ	セントルシア	ペリズ	小計
～平成22年度	31	11	9	7	5	4	3	2	2	1	1	1	1	1	79

東欧地域		小計
～平成22年度	フルカリア	3

2. 派遣地域別

全地域合計	中近東アフリカ	アジア大洋州	中南米	東欧	派遣合計
～平成22年度	240	168	79	3	490
～平成18年度	235	164	78	3	480

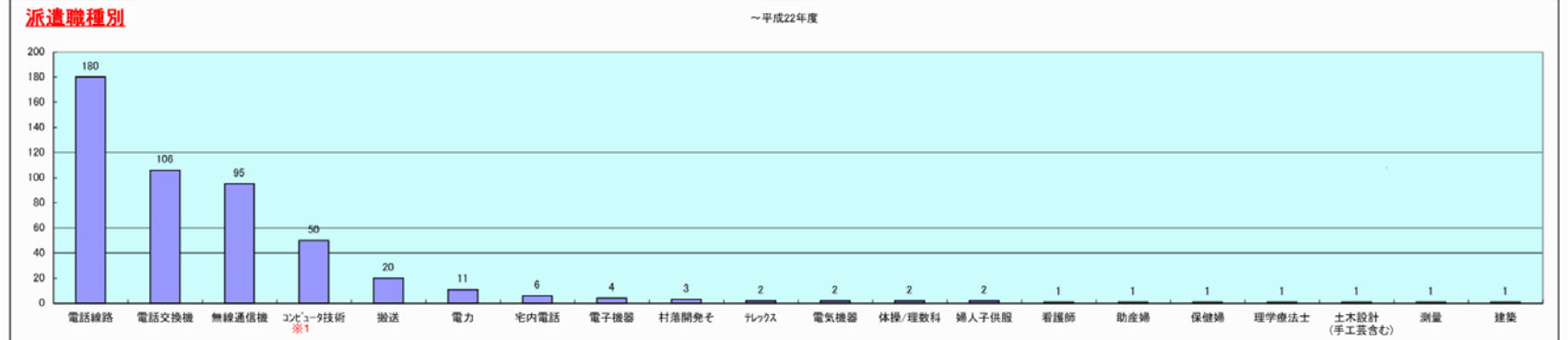
派遣国	総派遣国
H21	49
H18	45



3. 派遣職種別

※1:コンピュータ技術は旧システムエンジニア、PCインストラクターを。婦人子供服は手工芸(1名)を含み、体操競技・理数科教師(2名)の省略。

	電話線路	電話交換機	無線通信機	コンピュータ技術	搬送	電力	宅内電話	電子機器	村落開発	テレックス	電気機器	体操/理数科	婦人子供服	看護師	助産婦	保健婦	理学療法士	土木設計	測量	建築	小計	
～平成22年度	180	106	95	50	20	11	6	4	3	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	490
																						0



4. 年度別派遣数

注)事業年度による集計で実績値計上(4月1日から翌年3月31日)

1966年度	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986
～1986年度	5	1	4	0	6	0	12	7	14	12	9	13	10	11	11	10	14	10	23	25	23
1987年度	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
～2007年度	25	16	36	23	30	19	25	18	4	6	6	7	6	10	6	7	4	1	4	10	0
2008年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016												
～2016年度	1	5	1	0	0	0	0	0	0												

※2010年数値は、派遣予定者(1名)含む。

1966年度	小計
～	490
2009年度	

